

(10) キウイフルーツ

主要病害虫別防除方法

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
花腐細菌病 (細菌)	①適切な整枝剪定と枝の配置により通風、採光を良くする。ただし、台風などによる早期落葉は翌年の多発生を招くので、防風対策は十分に行う。 ②排水を良くする。 ③菌の越冬源となる異常休眠芽(芽先が割れる)を除去する。 【参考事項】 病原菌は樹上の樹皮表面や休眠芽に生息する。4月上旬以降開花期頃に雨が多いと多発する。	①発芽初期に銅水和剤(Zボルドー)、カスガマイシン・銅水和剤(カスミンボルドーなど)などを散布し、花蕾肥大期とがく裂開期(花卉出現初期)に登録のある農薬を2～3回散布する。特に、がく裂開期の防除が重要である。 (例) カスガマイシン液剤(カスミン液剤) ストレプトマイシン水和剤(アグレプト水和剤、マイシン20水和剤)
かいよう病 (細菌)	①低温障害を受けやすい地形での栽培を避ける。 ②防風ネットを張る。 ③12月頃から枝幹部を防寒する。 ④5月に枝幹部の発病組織を周囲の健全組織を含めて除去する。 【参考事項】 病原菌は葉の病斑部内及び枝幹部内に生息する。降雨によって気孔及び傷口から感染する。接ぎ木でも伝染する。病原性の異なる4系統が存在する。生育に好適な温度は10～20℃程度である。	①樹幹注入処理:果実収穫後落葉期前の11月中旬～下旬に穴を開け、農薬を注入する。 (例) カスガマイシン液剤(カスミン液剤) ②農薬を散布する。 (例) (発芽後から新梢の長さ約10cmの頃まで) カスガマイシン・銅水和剤(カスミンボルドー) (つぼみ肥大期～開花初期の頃) ストレプトマイシン水和剤(アグレプト水和剤、マイシン20水和剤など)
果実軟腐病 (<i>Botryosph- aeria, Diap- orthe</i>)	①病原菌は果梗枝及び枯枝で越冬するので、剪定枝、果梗枝、枯枝を適切に処分する。 ②適正な剪定により通風、採光を良くする。 ③追熟温度は15℃以下とする。 【参考事項】 病原菌は樹上の枯れ枝、枝幹の切傷部、裂傷部に生息する。枝幹に形成された柄子殻から出た柄胞子で伝染する。発病適温は20～30℃で梅雨期に感染が多い。	①幼果期(6月上旬)、梅雨期(6月下旬)、果実肥大期(7月上旬～下旬)、収穫前に農薬を散布する。 (例) イミノクタジンアルベシル酸塩水和剤(バルコート水和剤) チオファネートメチル水和剤(トップジンM水和剤) ベノミル水和剤(ベンレート水和剤)
クワシロカイガラムシ	①寄生枝を剪定する。 ②枝葉の込み過ぎを避け、園内の通風を良くする。 【参考事項】 成虫で越冬する。5月、7月、9月の年3回発生する。果実にも寄生する。	①せん定終了後、発芽前までにマシン油乳剤(トモノールS、スプレーオイル)(カイガラムシ類)を散布する。 ②5月上旬～中旬の第1世代1齢幼虫を重点に農薬を散布する。 (例) アセタミプリド水溶剤(モスピラン顆粒水溶剤)(カイガラムシ類) ピリフルキナゾン水和剤(コルト顆粒水和剤)(カイガラムシ類) フェンピロキシメート・ブプロフェジン水和剤(アブロードエースフロアブル)(カイガラムシ類)
カメムシ類	①防虫網で覆う。 ②黄色蛍光灯でチャバネアオカメムシ成虫の飛来を防止する。 【参考事項】 成虫で越冬する。幼虫はスギ、ヒノキ、クワ科植物などで育ち、成虫が果実に移動して加害する。	①果実肥大期から加害するが、加害時期は年により変動が大きいので、園内への飛来状況に応じて防除する。 (例) クロチアニジン水溶剤(ダントツ水溶剤) ジノテフラン水溶剤(スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤) ペルメトリン乳剤(アディオン乳剤)
キイロマイコガ	①放任園などは成虫の飛来源となるおそれがあるので、園地周辺の環境を整備する。 【参考事項】 老熟幼虫で越冬する。成虫は年2回発生し、成虫が発生してから、ほぼ2週間前後から防除適期になる。	①6月中旬～7月上旬の第1世代幼虫期に農薬を散布する。 (例) カルタップ水溶剤(パダンSG水溶剤) シベルメトリン乳剤(アグロスリン乳剤) フルベンジアミド水和剤(フェニックスフロアブル)
ハマキムシ類	①剪定枝には越冬幼虫や卵がついているので園外に運び出して処分する。 【参考事項】 幼虫で越冬する。年4～5回発生する。6月中旬～7月下旬に発生が多い。	①発生初期に農薬を散布する。 (例) BT水和剤(ゼンターリ顆粒水和剤など)(果樹類) フルベンジアミド水和剤(フェニックスフロアブル)